

江戸時代のパンデミック

新型コロナウイルスによるパンデミックがなかなか収まらない今だからこそ読むべき本として「感染症の日本史」（磯田道史著 文春新書）をご紹介します。著者の磯田氏は映画「武士の家計簿」の原作者として有名な歴史学者です。歴史を教科書とは違った切り口で語り、人々の生きてきた記録としての歴史を易しく読みやすい文章で教えてくれます。

この本には様々な感染症が登場しますが、江戸時代のパンデミックの様子についてご紹介します。

南総里見八犬伝で有名な滝沢馬琴は文政三（1820）年に流行した感冒について「一家十人なれば住人皆免るるものなし」と強い感染力を持ち「江戸は九月下旬より流行し十月が盛りであった。京、大坂、伊勢、長崎などは九月に盛んだった由。」と外国との交易のあった西日本から始まり、東日本へと大流行が広がっていったと随筆に記しています。

今困っているのは、観光業や飲食業ですが、似たような現象は当時もありました。享和三年の麻疹の大流行で「街道沿いの茶屋や旅籠屋は、大方店を閉めて休業した。」「初冬一ヶ月は、江戸中の湯屋（銭湯）も浴びるもの多からざりしかば、風邪流行に付き、夕七つ時（午後四時）早仕舞いという札を出し置きたり。」と休業や時短営業がおこなわれていたのです。

当時すでに定額給付金があり、貧乏長屋の町人には一人につき米五升、女は四升、三歳以上の子供には三升ずつ米が配られています。以前は金銭を給付したのですが、このときは米を配っています。金を配るとすぐ酒にして飲んでしまったのかもしれませんが。

江戸時代の医療支援としては、安政六年のコレラ大流行時に大坂の薬屋が協力して薬を配りました。大坂の東町奉行も薬（生姜湯のようなもの）を出しています。もちろん全く効果は無く、単なる実績作りだったようで、今の安倍のマスクそっくりです。

今の自粛は感染拡大を防ぐためですが、江戸時代の自粛は殿様を守るためでした。江戸人の多くは幼児期に疱瘡（天然痘）にかかりました。将軍も周囲が自粛をしたはずなのに歴代15人中14人が罹患し、天皇も15人中7人が罹患しています。岩国藩では遠く離れた村を隔離地域に指定し、患者、看病者、隣家、訪問者、隔離先の村人までもが隔離されました。特筆すべきは、単に隔離を強制するだけでなく、退飯米といって隔離費用を生活費を含めて領主が負担したのです。大変な財政負担ですが、その結果岩国藩では歴代誰一人として藩主は疱瘡にかからなかったとされています。これに対して大村藩では病人を山中の小屋に放置し、全ての費用を自己負担としたため、家族が疱瘡にかかると破産してしまうとされています。給付なき隔離がいかに過酷なものであるかを歴史は教えてくれます。

これ以外にもこの本にはスペイン風邪の濡れ衣など面白い話がたくさん載っています。ぜひ一読されることをお勧めします。

校医 岡崎 久恒